

言語教育における インクルージョンを考える

山崎直樹 ymzknk@kansai-u.ac.jp
(関西大学外国語学部／外国語教育学研究科)

関西大学外国語教育学会第19回研究大会, 2025/03/16

自己紹介

- 所属：関西大学外国語学部／外国語教育学研究科
- 教えている言語：中国語
- 専門：中国語の学習設計

今日の話

- ここ数年、山崎が加わっている研究課題（※）では、何をやっているか

※ 「言語教育におけるインクルージョンを実現するための当事者駆動型言語学習環境設計」 2020-2024, 代表：植村麻紀子（神田外語大学）

「言語教育におけるインクルージョン実現のためのケース教材を中核とした研修開発と検証」 2024-2026, 代表：植村麻紀子（神田外語大学）

- 成果：<http://incl4lang.html.xdomain.jp>
- 参考文献：<https://scrapbox.io/2025-03-16Gaikyoo/INDEX>

今日お伝えした情報に価値があると思うかたのために……

- 科研の成果：<http://incl4lang.html.xdomain.jp>
- 言及したリソース：<https://scrapbox.io/2025-03-16Gaikyoo/INDEX>（**スライドの最終版**もここに置きます）

言語教育におけるインクル



ージョンを考える

言及したリソース



ポイント

1. 「インクルージョン inclusion」とは何か？
2. 「言語教育」と限定したのはなぜか？

「インクルージョン」とは

ことばの意味

- 「包摂」
- 何者をも排除しないこと

……では、我々はどんな人を排除しているのか？（特に、学校教育の場で）

「インクルーシブ教育」とはちがうのか？

最近、「インクルーシブ教育」ということばをよく聞きます。

日本では、このことばは、目下のところ、初中等教育における障害児の教育と関連づけられることが多いようです（そうしないといけない理由はないと思いますが）。

（この方面に特に関心がある人へ）【↓】の本が参考になります。

『イタリアのフルインクルーシブ教育：障害児の学校を無くした教育の歴史・課題・理念』

『フルインクルーシブ教育見聞録：イタリアの現場を訪ねて』

余談(1)

「インクルージョン」「インクルーシブ」と聞くと、みんな自分がやましさをを感じる領域をまっさきに連想する。

〈例〉

日本：障害のある子ども

オランダ：？

われわれは誰を排除しているのか？

- 排除の6類型（カセム他, 2014）
- もう1つ付け加えたい

カセム他（2014）の6類型

感覚的排除

知覚的排除

身体的排除

デジタル化による排除

感情的排除

経済的排除

山崎の私案でもう1つ

言語的排除

感覚的排除

- 聴覚……聞こえにくい、聞こえない
- 色覚……色の識別がしにくい
- 視覚……見えにくい、見えない
- 感覚過敏……明るさが苦手、音が苦手

考えてみてください……

このような学習者がクラスにいたら、あなたがふだんの授業でおこなっているアクティビティにどのような調整が必要になるか？

特定の感覚（見る、聞く…）を指定した能力記述文は？（山崎, 2020）

知覚的排除

- 発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症……）
- 学習障害（特に読字、書字における困難さ……など）

例えば……【↓】のような前提はもはや成り立たない

「みんな同じスピードで文字が読んで書ける」「みんなが人前で音声を発することができる」「みんなが90分、教室に座って……」

身体的排除

- 肢体不自由、運動機能障害
- 施設のバリアフリーの問題（例：車椅子での移動）

このような学習者がクラスにいたら、あなたがふだんの授業でおこなっているアクティビティにどのような調整が必要になるか？

デジタル化による排除

デジタルディバイド Digital divide (ICTへのアクセスの容易さや利用能力における格差)

- 知識がない
- 情報端末、通信環境のインフラが整っていない
- 使用するツールがバリアフリーに対応していない
- 国によって利用できないオンラインリソース、コミュニケーション道具、SNSがある

感情的排除

- 社会からの疎外感
- 個人や組織における孤独感
- 「仲間内だけでやっている」 「××な人（ひと）しか相手にしていない」
「××人（じん）しか相手にしていない」

経済的排除

- 高額な金銭的成本
- 情報機器、通信インフラのコスト
- 次の主張をどう思いますか？

「外国語を勉強するなら辞書は必須」

言語的排除

- **CLDL** (※) に対する、言語的背景を理由にした排除
 - ※ **C**ulturally and **L**inguistically **D**iverse **L**earners
- 日本の学校制度は、日本語モノリンガルな育ちかたをした一様な学習者を前提に設計されている

で、我々は何をしているのか？

- 目下の対象
- どんな活動を

対象

目下のところ、主に、【↓】を対象にしています。

相手：高校生～大学生くらいの学習者

排除の種類：知覚的排除

- 発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠如多動症などに伴う困難）
- 学習障害（読字障害、書字障害……）

何をしているか

- 事例教材の開発
- 事例教材を使ったワークショップ

【実績】 城西国際大学、神田外語大学でのFD活動

〈事例教材〉

- 教室内外で、自らの持つ特性ゆえにさまざまな学習上の困難に直面している学習者の事例を巡って、いろいろな見解を紹介し、それを元に話し合いをしてもらうための教材
- 取り上げられている事例は、実際に見聞したさまざまな事例を元に、我々が再構成したもの

制作中の5種類の事例教材の冒頭部分

<http://incl4lang.html.xdomain.jp/index-tmaterial.html>



3つの事例教材の「事例」を紹介する部分

<https://scrapbox.io/2025-03-16Gaikyoo/INDEX>



2つの事例教材の全体像

<http://incl4lang.html.xdomain.jp/index-tmaterial.html>



言及したリソース



ダイジェスト動画もあります

事例2「スケジュール管理が苦手で、忘れ物ばかり」のダイジェスト動画

<https://www.youtube.com/watch?v=NvR7owulQCg>

事例2のダイジェスト動画



我々のアプローチの特徴

1. インクルーシブなデザイン手法
2. ミクロ／メゾ／マクロの3つのレベルで問題を考える

1. インクルーシブなデザイン手法

- 企画～設計の段階から、コアな当事者に研究協力者として参加してもらう
(カセム他, 2014)
- 我々の協力者: 2名

2. ミクロ／メゾ／マクロ

社会のレベル
(制度、イデオロギー、常識……)

学習環境のレベル
(学習者を取り巻くコミュニティ)

個人のレベル
(個人の特性・障壁)

支援を教員個人の負担にせず、組織の責任、社会の責任として考えるために

なぜ「社会」か？

- 「障害」を捉える2つのモデル
 1. 医学モデル：「障害」は個人の中にある
 2. 社会モデル：「障害」を作り出しているのは社会制度

👉 松波 (2024)

なぜこのようなことを始めたか

- 発達障害・学習障害への認知が広まるにつれ、「あのとき教えた××さんは、もしかして……？」と思いがたる節が……
- 「成績が悪い／単位を落とす」を、本人の努力不足のせいにしてきた
- 本人の努力ではどうにもならないことを本人にせいにしてきたのでは……という反省

ついでながら……

我々は、自分ができるとは、自分の**努力**の成果だと見なし、自分ができないことは、自分の**素質**のせいにしたがる。

事例教材を使ったワークショップでのリアクション(1)

けっきょく、どうすればよいのか？正解は？

うちにもこんな学生がいる、障害があるのでは？

「障害」があるのか、単に怠けているのか、どうやって見分ければいいのか

知らんがな……

重要なこと(1)

- 支援はパターン化できない
- 必要な支援は、みな違う
- 「その学生は、あなたの授業でどんなことに困っているのですか？その困りごとを把握し、解決のために話し合ってください」

事例教材を使ったワークショップでのリアクション(2)

診断を受けていなければわからない

配慮申請が出ていないので何もできない

他の学生が不公平と感ずることはいできない

「合理的配慮」といふことばに囚われすぎているのでは？

重要なこと(2)

- 「不公平な……」 ← 公平・不公平、努力の有無を問題にするのは、完全に参加を保障することができてからでは？
- 「診断」「配慮申請」 ← 「合理的配慮」は法律に基く義務の話。教師が自分の授業にうまく参加できないでいる学生のために、何らかの調整をおこなうのは、「教育的配慮」である。

事例教材を使ったワークショップでのリアクション(3)

これぐらい
のことができないと
社会に出てから困るの
では？

学校は失敗をして学
ぶところだから……

どんな人が作った「社会」か？

この学生は
これまでさんざん辛い
失敗を重ねて、今ここに
いるのでは

重要なこと(3)

- 「学校は失敗をして……」 ← 今の大学は失敗を許容できるところになっているかな？
- 「これぐらいできないと社会に……」 ← その社会はマジョリティが作ったもの、なぜ、社会のほうを変えようとししないのか？

👉 勅使川原真衣ほか編著 (2024) 『「これぐらいできないと困るのはきみだよ」？』 東洋館出版社

「合理的配慮」について

- 「配慮」の原語は accommodation、「調整」と訳すべき
- 「過重な負担とならない範囲で、本質の変更を伴わないよう、当事者と話し合って調整をする」
- 合理的配慮をしない／できないときでも、教育的配慮はおこなってさしつかえない

「話し合って……」

- 配慮申請の通達に書いてることを実行していればよいと考えてはいませんか？
- 配慮申請の書類に書いてあることだけでは、多くの場合、不十分
- どのような「調整」が必要なのか、当事者と話し合う必要がある
- 当事者抜きでは決められない (Nothing about us without us.)

👉 斎藤清二他 (2010)

「過重な負担」

- 何もしないことの言い訳によく使われる
- しばしば教員個人の負担のもとで「配慮」がおこなわれるが……
- ふだんから、Universal Design (※) を意識しておけば……

※ すべての人の参加が可能なように意識された設計

👉 ホール他 (2018)

「本質」の変更

- 何もしないことの言い訳によく使われる
- 我々が「本質」だと思っていたことを疑ってみたらどうか？
- 例えば、
 - 眼に見えるようなスキルの習得をゴールにする
 - 成績を一次元的な数値で表す
 - 能力試験で使われるゴールを、無意識のうちに、授業のゴールにしていないか？

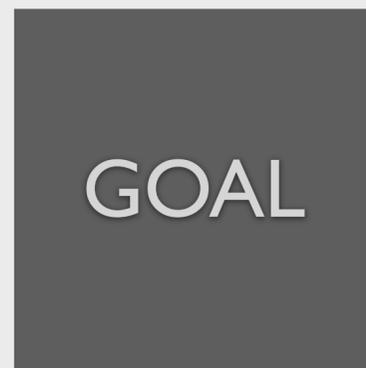
「本質」を考え直す

- これこそが、我々が、「言語教育における……」と限定している理由
- 「言語教育において本質的に重要なことは何か？」という問いかけをするため

余談(2)

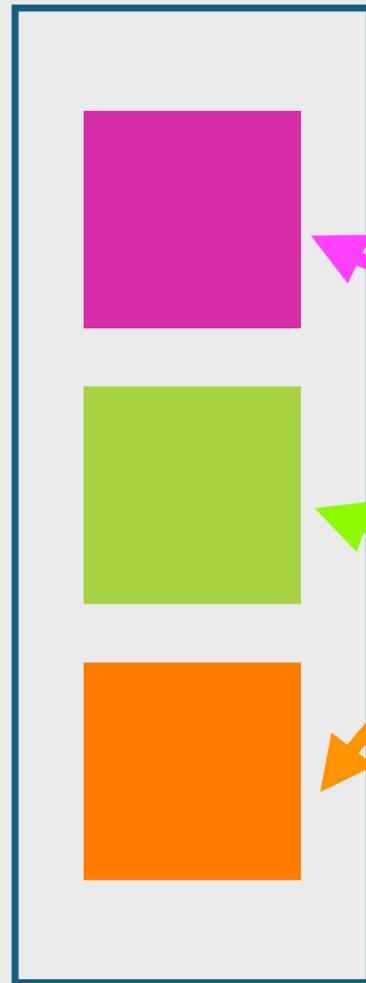
我々は、コロナ禍のオンライン授業を体験することにより、我々の授業が、いかに「監視と拘束」を前提として成り立っているかということに気がついた（特に、「評価」の領域で）

ゴールさえ動かさなければ



「ゴールさえ動かさなければ
そこに至るルートは自由でよい」

「ゴールは予め決められた1つのもの」
でなければならないか？



ゴールは、絶対に、前もって
決めておかねばならないか？

「本質的に重要な」の枠内なら
複数のゴールがあっても……

学習環境の整備が負担軽減につながる

- 瑣末な技術的問題であれば、あらかじめ「参加のための障壁」を取り除いておくことにより、個別の調整の手間を軽減できるかも……
- 次は、ほんとうに瑣末な技術的な問題ですが、山崎が授業開始時に配布している文書の一部です。

授業中に一時退室したい場合は、いつでも黙って退室してけっこうです。「ちょっと外の空気を吸いたい」という理由でもかまいません。許可を取る必要も、理由を言う必要もありません。戻るときも黙って入室してかまいません。

帽子、頭巾、スカーフ、遮光用眼鏡、遮音用器具等を装着したまま授業を受けてもかまいません。さまざまな理由でそれらを身につける必要がある人も、その理由の説明は不要です。

[授業中に帽子等をかぶったままにいる人がいることに抵抗がある人へ]

病気治療中である、あるいは宗教上の慣習であるなどの理由で、これらの装具を必要とする人がいます。また、その理由の説明を求めることは、極めて個人的な事情の開示を要求することになります。

[授業中にサングラスやヘッドフォン様の器具を付けたままにいる人がいることに抵抗がある人へ]

視覚過敏、聴覚過敏などの傾向がある人は、これらの器具を必要とします。その理由の説明を求めることは、極めて個人的な事情の開示を要求することになります。

最後に……

これまでにおこなった当事者へのインタビューの中から、印象的なことばをいくつか紹介します。

当事者のことば(1)

「興味のないことをするのが苦手」「やるべきことの優先順位をつけるのも苦手」「(プロジェクト型の課題など) 何から手をつけていいかわからない」「見通しのない課題に対する不安がある」

「言われてることは分かるんだけど、言われてるものの意味が理解できないことがあるんです。文としては聞き取れているし、音も聞き取れてるんですけど、意味が分かっていないんです。継次処理でまかなえるものだったりパターン化したものを理解するのは得意なんですけど、抽象化して概念を理解するのが難しいです。時系列に、しかも的を絞っていったっていかないとだんだん分からなくなります。」

（あなたが教師だとして）予備知識なしにこのことばを見たとき、どう思う
でしょうか？

次の文章は、〈事例教材〉の中のASD, ADHDの解説部分です。これを読んだ
ら、印象が変わりますか？

……自閉スペクトラム症（ASD）の傾向を持つ学習者がいた場合はどうでしょう。ASDはコミュニケーションおよび相互関係の障害で、冗談や比喩が理解できなかったり、非言語的なサイン（表情・目配せなど）を読み取るのが苦手です。同一性へのこだわりや興味・関心の狭さも特徴で、予定の変更などにも対応がしにくく、特定の物事に強いこだわりがあるため、テーマさえ決まればとことん調べる傾向もありますが、自分に関心のないことには力を注げないという傾向も指摘されています。

発達障害のある人のうち、ASDの人は、耳からの情報処理が苦手なことがあり、指示が聞き取りにくかったり、聞き間違えたり、長い説明が途中で分からなくなったりする場合があります。また、ADHDの人は、同時に複数の情報が入ってくると、どれに注意を向けていいのが混乱することがあります。

この人は……

- 高校生のときに、ある外国語を独学で学び、その外国語のスピーチコンテストで賞を取りました。
- 大学でもその外国語を学び続け、留学もしました。
- 大学院に進み、修士号を取得しました。
- その外国語を使う専門的な職業についています。

当事者のことば(2)

驚くことに、2カ月、僕はそのプログラムを受けて、いろんな器材だとかがあっただすけれども、読み書きが英語でできるようになったんです。ほぼほぼ大差がないくらい、現地の子と。もともとあった英会話のレベルも上がりましたし、初めて人並みになった感覚がありました、小学校5年生を終えたときに。これが周りの子が感じていた普通なんだと。

(読字・書字障害あり。小学生のときに渡英、そこで特化したプログラムの教育を受けた)

この人は……

- 小学生のときに、日本に見切りをつけ、渡英
- そのまま英国で、中・高と進み、大学で心理学を修め卒業
- 現在、フリースクールの校長代理
- 第1言語は日本語（しかし、日本語はこの人にとって、自由に使える道具ではなかった……）

考えてみてください

この2人が日本の学校教育で、いろいろな困難に直面したのは、「努力」が足りなかったからだと思いますか？